

シェール革命で進む日本の中東依存度低下

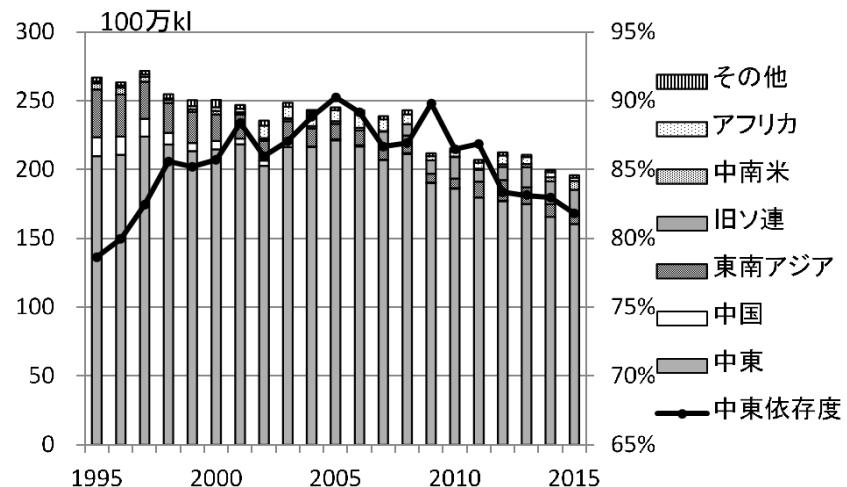
計量分析ユニット 江藤 諒

1. 原油輸入の中東依存度が19年ぶりの81%台

2015年の日本の原油輸入量は前年比382万kl減少の1億9,587万klとなり、3年連続の減少となった(図1)。地域別では中東からの輸入量が前年比で536万klと最も減少した結果、日本の中東依存度は1.1p減少の81.8%となり、1996年以来の低水準となった。

1990年代以降は中東以外の輸入先であった中国や東南アジアなどで工業化進展による石油需要増から、これらの国々の輸出余力が徐々に低下したことで2005年まで中東依存度が高まっていた。輸入量全体が減少する中で、2006年10月にロシアのサハリンからの輸入が始まり、再び中東依存度は減少傾向を示した。2015年は旧ソ連からの輸入量は前年比で108万kl増加し、輸入シェアは過去最大の9.1%を占めた。さらに、2015年は中南米からの輸入量が前年比324万klと大きく増加した。中南米の輸入シェアは1991年以来の3.2%となり、2014年の1.5%から大幅に増加した。

図1 原油輸入量と中東依存度の変化



出所：経済産業省「石油統計速報」、「資源エネルギー統計」

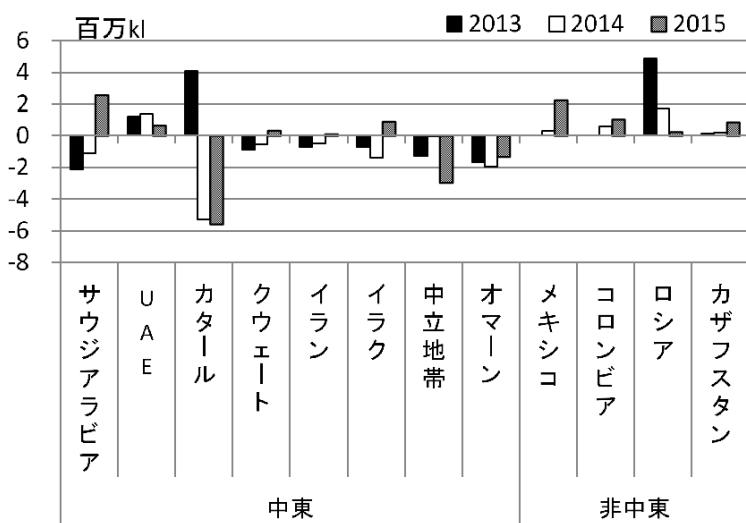
2. 2015年はカタール、中立地帯で生産量減少、中東以外ではシェール革命の影響

国別の輸入量の変化を見ると、中東の中で2015年に輸入量が減少した国、地域はカタール、中立地帯、オマーンであり、これが中東依存度の減少に寄与している(図2)。カタールからの輸入は2年連続で、オマーン、中立地帯からの輸入は3年連続で減少している。一方、全体の3割強を占めるサウジアラビアからの輸入量は過去2年減少していたが、2015年は257万kl増加した。2割強を占めるUAEからの輸入量は日本全体の輸入量が減少し

ている過去3年でも増加している。さらに、2015年は2年連続で輸入量が減少していたクウェート、イラン、イラクからの輸入量も増加した。

2015年に輸入量が増加した中南米では、メキシコが中南米の増加分の69%を占める225万kl増加と大きく増加した。一方、ロシアからの輸入は過去2年で最も増加量が大きく中東依存度低減に最も貢献していたが、2015年の増加量は23万klと限定的となった。2015年は旧ソ連の中でカザフスタンが85万klの増加となり、旧ソ連の増加分の79%を占めた。

図2 日本の地域別原油輸入量の対前年変化



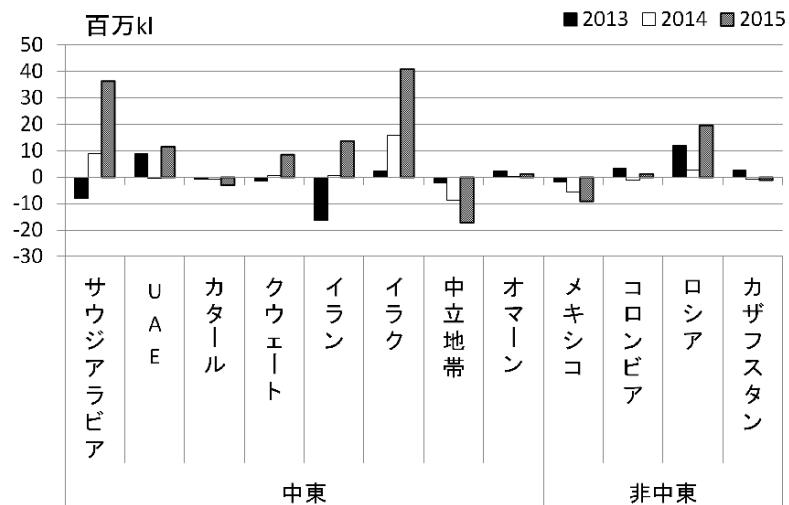
出所：経済産業省「石油統計速報」、「資源エネルギー統計」

OPEC加盟国は2014年11月の総会で市場シェア、及び石油収入を維持するために需給調整役を放棄した。その結果、2015年はほとんどのOPEC加盟国で生産量を増やしている（図3）。一方、中東OPECの中で、日本が輸入量を減らしたカタール、及び中立地帯では過去3年で生産量が減少し続けている。カタールでは、既存油田の老朽化が進んでいる中で、新規油田が開発されなかつたこと、原油価格が低下していることから生産量が減少した。中立地帯では唯一の油田であるカフジ油田が環境問題を背景に2014年10月以降に生産を減少させ、2015年6月には生産量がゼロとなった。カタール、中立地帯からの原油輸出はアジア、太平洋向けのみであり、日本の中東からの輸入量の減少はこの2地域の生産量の減少が大きく影響している。

さらに、中東以外の国からの輸入の増加はシェール革命の間接的な影響も大きい。北米での生産増加、OPECの生産シェア維持によってもたらされた供給過剰による原油価格の下落もあり、メキシコやカザフスタンでは2015年の原油の生産量が減少している。特に、メキシコでは2013年まで民間投資を受け入れていなかつたことから石油開発が遅れていたが、米国への輸出減少が生産減少に拍車をかけている。米国に代わる輸出先として、日本

への輸出を増加させている。

図3 主要国の原油生産量の対前年変化

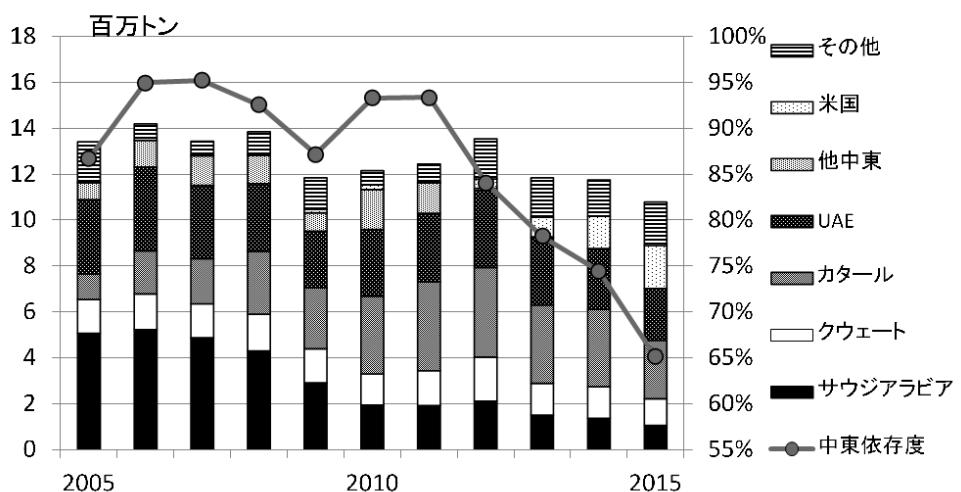


出所：Oil Market Intelligence

3. LPG 輸入の中東依存度は 1965 年以降最低の水準に

原油に加え、2015年のLPGの輸入量も前年比97万t減少の1,078万tとなり、3年連続の減少となった。そして、2015年の中東依存度は前年比9.3p減少の65.1%となり、1965年以降最低の水準となった。LPGは輸出が原則禁止されていた原油と異なり、以前から米国が輸出することができたため、シェール革命の影響はより顕著に表れている。米国からのLPGの輸入は2011年以降着実に増加しており、2007年に95.2%であった中東依存度はわずか8年で30p減少している。

図4 LPG輸入量と中東依存度の変化



出所：経済産業省「石油統計速報」、「資源エネルギー統計」

4. さらなる供給先の多角化を

原油の中東依存度は減少してきているものの、依然として8割を超えており、2016年2月にはサウジアラビアとロシアにより、生産量を2016年1月水準で維持する提案がされた。しかし、2016年1月の生産水準が高位であることを踏まえると、供給過剰は続くと予測される。さらに、2015年12月には40年ぶりに米国からの原油輸出が解禁されたことから、4月には米国からの原油輸入も始まる。米国への輸出量を減少させる中南米やアフリカ、日本に距離が近い旧ソ連などからも輸入を増やすやすい環境になると予測される。

原油価格が低い水準である間に産油国の石油部門への投資や権益取得による自主開発を一層進め、将来に備えるべきである。イランとサウジアラビアの断交など中東のリスクはさらに高まっている中、原油でもLPGと同様に中東依存度を減らすため、さらなる供給先の多角化が求められる。